

# 読者のページ

## これからの道路

公害対策局 金子隆一

現代の都市に住む人間は、さまざまな恩恵を都市から受けている。これは否定できない事実である。しかし、失ったものが得たもの以上に多いということも、また確かである。人はそれを忘れてしまっている。さもないければ、失ったものの大きさに気がつかないだけである。

道は、少し前まではそう危険を感じずに歩けたものだ。それがわずかに二十数年後の今日では、人は車を気にしながら道路の片すみを小さくなって移動している。

日本の道は歴史が物語っているように、いわゆる「馬車の時代」を経験してこなかった。そ

のために、現代の交通革命ともいべき車の急増に行政の対応がついてゆけないまま今にいたっている。その結果は我々のまわりを見回せば一目瞭然だ。

車が生活の一部になってしまった現代人から車をとり上げることができない以上は、人と車の共存を図る方向で、これからの都市計画を進めてゆかなければならないだろう。これは都心の再開発よりも力を入れて取り組んで欲しい。周辺部の住民特に幹線道路沿いの市民は、車公害に日夜悩まされている。

それではどうしたらよいのだろうか。一例として考えられるのは、道路周辺の住環境の改善である。道路の幅員に余裕があれば車道を狭くし、歩道を広くとるように改良することである。さらに歩道に植樹帯を設ければなおけっこうである。車道を狭くすることにより車速が制限され、事故も少くなり(だぶん)騒音・振動も小さくなる。歩道が広ければゆったりと歩くことができるようになる。道路行政の量から質への転換を切に望むしだいである。

## 二十一世紀の地形図づくり

水道局 渡辺佳持

水道局では、種々な地形図を利用してきましたが、現在は横浜市の一メッシュとして、国土調査法及び測量法に基づき、一七座標系の第九系から作成した直角平面標座である二五〇メートルメッシュを単位とする縮尺五百分の一地形図を使用しています。この統一メッシュ地形図を使用したことにより、配管図として内容の充実化、記入精度の向上があり、局内局外への連絡、調整等が容易になり、著しい進展が計られています。横浜市においても将来、膨大な資料をメッシュデータとして地形図とリンクさせ、電算化し、行政上の資料として、また、市民の多様なニーズに対応するための資料として利用されるものと思います。

しかし、ここで情報を正しく将来に向けて継続させて行くには、いくつかの問題点がありますが、特に次の点を指摘したいと思います。

一、地形図の経年変化に対する補正は、横浜市が統一の方針を定める。

一、各部局の関連する属性の補正は、横浜市が一定の補正周期を定める。

これら、総合的な解決の方法として、現在都市科学研究室で「地域情報システム」の可能性の調査研究が行われています。その研究の一分野として地形図の大縮尺から小縮尺までの電算化、また資料(測量成果)を電子計算機に入力し、自動的に各種の地形図が補正されるシステム、なお上の世情報の補正システムの技術的な研究が行われています。

〈あとがき〉私たちが仕事との関連で「外国の都市」を考えるのは決まって欧米の都市であり、「アジアの都市」は意識から欠落しているといえる。欧米をモデルに都市行政を進めてきたことからすれば当然ともいえるが、それだけではいけないのではないかと考え、六月の国連アジア大平洋都市会議を機会に、アジアの都市問題を集めた。

このようなシステムを実用化するのには、大変むずかしい問題であると思います。しかし、未来の素晴らしい「ヨコハマ二十一世紀プラン」と歩調を合わせ、未来の地形図作りが進展して行くことを期待しています。

『調査季報』は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで(電話六七一一二〇二九)。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。七〇〇字以内。

編集の過程で終始議論になったのは、アジアの都市との関わり方と視点は何かということである。横浜の都市問題を考える延長上にこれまで、欧米の都市は見えてきて、アジアの都市は見えてこなかったことが実は問題なのだ。視野をひろげて、まずアジアの都市を知ることが大事だと思う。その上で議論が始まるのであろう。〈北小路〉